



桜井孝身の絵の世界 ●深野 治

5

その頭上には、つつましい花が飾られている。顔の強い輪かくには、まだ癒えきれぬ孤独の深さがにじんでいるが、真つすぐに上げた瞳の強さが、その後の桜井の絵画世界の開花を予知させる。

一年ののちに一時帰国、再び彼はアメリカへ帰っていく。精神的孤高のビートニック運動は、時あたかも大衆の中枢に降り立ち、すさまじいばかりのヒッピーの渦がまき起こっていた。LOVE そして PEACE - ベトナムへ駆り立てられていくアメリカの若者が、人間の証明のために打ち樹てたスローガンの怒涛のような広まりの中で、桜井ははっきりと自分と他人の谷間を越える、人間の愛のあかしをつかみとる。

桜井の新しい絵で、大海に漕ぎ出す舟は無数の人々のこぐ糧によって進む。その舳には大きく胸を張った彫像がそびえ立ち、女たちは空いっぱいのでやかな花に飾られている。LOVE そして PEACE は、政治的スローガンとしてではなく、人間が人間として生きるための、あらゆる差別を乗り越えるための武器として、何よりも桜井が見つかった思想原理として立ち現われてくる。

この第二期(二度にわたるアメリカ滞在期)に、桜井は一つのピークに達した、と私は考える。画家桜井孝身はゴーギャンへの傾倒から出発したと聞いたことがあるが、そのゴーギャンに次の言葉がある。

「ひとりの人間の作品とは、つまりその人間を説明するものだ。その中には、二種類の美が存在する。第一は、本能から生まれたものであり、第二は探求からもたらされたものである。これらふたつが結びついて生み出す多様な変化は、確かに複雑であり、かつ実り豊かなものを創造するが、美術批評家は、それを見極める努力をしなくてはならない」